
繋いでいた、それだけ(宝島弟×兄)

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

繋いでいた、それだけ（宝島弟×兄）

【Zコード】

Z7964Y

【作者名】

エイノジ

【あらすじ】

宝島弟×兄

冬になると夏は暑いってことをよく忘れます

「川島ー、かーしまーあ

「そんな呼ばんくて、ここに留ますか?」

井上さんに呼ばれ、歩みを止める。

愛しい兄さんは、小走りで『もー川島くん、歩くの早いよー』なんて言わないし、最早小走りなどしない。さつきまでの歩調と何ら変わらず近づいて、俺の右腕を取り、顔を密着させる。

暫く時間が止まってしまったのか。

「何してるんですか」

「…冬の匂いがきた

訳が分からぬ。

申し訳ないが、発言の意図が分かりません。

「俺、冬の匂い好き」

そもそも冬の匂いとは何なのか。

それは俺の腕から放たれるものなのか。

俺の腕から放たれる匂いは勿論俺の腕の匂いだらうけど、井上さんが好きなのは腕ではなく冬なのだ。

一文字も合つてない。

一文字も、といつより、一文字などひしが合つてない。

「兄さん」

「川島」

あ、言つておくがこれは名前を呼び合つただけじゃない。そんな、恋人みたいなことはしない。

俺が“兄さん”と呼んだことに『俺はお前の兄貴じゃない』と怒った井上さんが“川島”と俺を咎めたのだ。

「…井上さん。そんなに好きならずっと持つててください」

「ええん？」

「その代わり、捨てんとつてくださいよ。飽きたからつて投げ出せんとつてくださいよ。最後まで面倒見てください」

季節は変わる。

冬になると、夏は暑いことひりとを俺だけは忘れる習性がある。

(後書き)

エムブロードバトン倉庫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964y/>

繋いでいた、それだけ(宝島弟×兄)

2011年11月23日18時48分発行